

# 針葉樹會報

復刊第19号

1967.8





発行日 1967年8月1日	針葉樹会報 復刊 19号	編集人 東京都台東区台東 3-20-6 平川紀男
発行所 針葉樹会 印刷所 錦光社		

端然と自然の前に坐さなければ端然たる自然の姿は解らない。敬虔なる緊張を以て対する時自然是最も厳かなる美を示してくれる。

頂を征服せんと憧憬れる者が頂に立った時彼の心は頂を征服した喜びでなく、威大なる自然を敬虔する事によつて起る歓喜に満ちている。而して彼は岩上に躊躇づかねばならぬ。

一本の枯木にも、踏みにじられた雑草にも、一塊の残雪にも自然の永遠の美と愛とを感じ得る者は幸福である。

数時間も身動きもならぬ深い藪を漕ぎ分けて岩間に湧き出する泉に永遠なる森の情を掬みたい。

人間の澄んだ心には深い自然の姿が美しく感ぜられる。

——松木謙三 針葉樹二号より

## 志賀高原の雪

柿原謙一

学校を卒業した昭和十二年に日支事変がおこつて、翌年には応召、そのまま太平洋戦争から敗戦とつづいて、昭和廿一年にやつとこさと青島から佐世保に復員して故山の土を踏むことができた。そんな訳なので野沢温泉上の平の春雪が最後で、昭和卅三年の年末子供をつれて越後の湯沢温泉を訪れるまで、スキーのスの字を忘れてしまっていた。

越後湯沢の風物の変つたのは一驚したが、汽車を降りればスキーができるのを便として、翌年からは芋をもむように混雜するゲレンデもいとわず、小学生の長男や長女と一緒に滑つたり転んだりして、家庭的な数年がたつた。乗鞍の雪が恋しいの、野沢の毛無山がどうのこうのと云つてみても、所詮ゆくのに時間がかかるから勤めの人の年末休暇では問題にならないとあきらめて、便利な越後湯沢に定着していく次第である。ここから眺めた蓬峰北側の山稜は美しい。

ところが昭和四十一年の歳末のこと、ふとした機会で長女をつれ、志賀高原の一ノ瀬を訪ねてここでスキーを楽しんだ。志賀高原が開拓宣伝されていたときには、すでに赤坂は檜町の歩一でカーキ色の兵隊暮しに馬の尻を洗つていた私には、悲しいかな志賀高原は全く未知の世界だったのであるが、このたび一ノ瀬で滑つてみて驚いた。豊富な粉雪、広大なゲレンデ、申しぶんのないス

キーリフト。加うるに、越後湯沢でのさっぱり上達もしないわがスキー技術と比べるをみつけることはまあ少い。それでも無理を

すると、何と志賀高原一ノ瀬においては上手にすべれるわが腕前へ? よ。しかも雪晴れの朝には、遠く千曲川をへだてて北信五山が雲

表に浮び、その左に連って北アルプスの姿が展望できる。一体全体どうしたわけだ、ああこの地は知らざりき——といった感銘を深くして、ヘソのあるスキーとヘソのないスキーの時代間隔をかみしめた。

正月もすぎて二月となつた。あの雪が忘れられず、銀座の岩崎君をお誘いした。東館山(二〇三〇m)の頂にたつて、妙高・黒姫の端麗な姿を眺め、お目にかかることがなかつた岩菅山の雪景を目の前にしたときは、スキーブームのおかげで樂々としたツアーノの許される昭和四十年代の幸福を、しみじみとかみしめた次第である。朝早く弁当をもつて「さかや旅館」を発つと、燈籠木峠から毛無山の頂についてお昼頃となる。あのアザラシ時代が懐しく想いおこされもした。

雪の肌昨夜吹雪きし 山晴れて

雪晴れの樹氷コースをすべらんか

岳友と杖ぶりかはし スキー行

こんな句が浮んだ。見まわすゲレンデや樹氷

コースに私と同じぐらいの年配のスキーヤー

せずにゆっくり滑っていると、結構粉雪にな

じむ楽しい山旅が味えた。この十二月の一ノ瀬がたのしみである。

アザラシつけたこともない恥や娘をふくめを若き男女に交つて、この親爺は赤帽子をかづいて滑つてやろうと、今から腕をさすつてみる。



## 目 次

志賀高原の雪

柿原謙一

二十七年ぶりの滝谷

大塚武

赤松バットレスのこと

加藤正己

会務報告

中島 寛

大阪針葉樹会懇親山行

倉知 敬

ヒンズークシユ通信

(16) (15) (11)

(10) (8)

(5)

(3) (1)

編集後記

## 一十七年ぶりの滝谷

大塚 武

どんなだろう。昔の早稲田の連中の入山の感  
慨が懐ばれる。

北海道から出て来て早々、若い連中が面倒をみてくるから滝谷へ行かないかという話がありました。山田と私が丹那。滝谷といふと内心ムラムラと来る、こんな機会はまたとない。うちの者には、滝谷は十回目だから、自分の庭に行くようなものさ。若い連中がついてくれるし、俺だって山田だつてもう無理はしないよ。天気が悪ければ戻るから心配することはない』といふことで、六月の二十三日の晩出かけることゝしました。新宿で全く久しぶりの中央線の山列車、まだ時季が早いので車内はガラガラ。昔滝谷へ行つたとき、山田、根本、佐藤と私で甲府を過ぎるあたりまで何かの議論をして行つたことがありましたかが、今度もまた経済評論家の山田先生をかこんでケンケンガクガク。それでも明日は歩かなくちやならないからしばらく寝ようやといふことで一等車へ引上げ。山へ行くのに一等車とは々会員諸兄も吃驚されるでしょう。実は学生時代に、卒業したら二等に乗つて（昔の二等ですゾ）人夫をつれて山へ行こう

や、『ということになつていたので、およそ三十年ぶりにそれを実行したわけ。

さて夜明けに松本着、電車で島々へ。こゝで徳沢へ行く小島君（四十年卒）と分れて、五人でハイヤーに乗る。島々から先は東電のダム工事で昔の梓川沿いの面影はない。沢渡あたりからようやく昔の印象がよみがえつてくる。坂巻温泉の先の『エロ松』は相変わらずの枝ぶり。中の湯から安房峠を越えて平湯へ。この頃から天気もだんだん好転。穂高や乗鞍、笠、抜戸が次々と豊富な残雪で美しい。平湯は昔、友田君の遭難のとき、根本と二人でここを通つて富山へ急行したことがあつたが、十二時半だった。中島君（三十六年卒）はこれから荷物を小舎に置いて槍を往復してくる

（3）  
この辺には川ぶちの温泉が多い。車は新穂高温泉からさらに五糠も入つて白出谷の出合まで運んでくれる。  
途中、穂高平と称するところあり。この邊からみた裏穂高、南岳、大喰のあたりの稜線はなかなか迫力のある景観、積雪の頃みたら

し前、滝谷の出合に着いたのは十一時半。空には少し雲霧が出て来たが、大きな石のゴロゴロした白い谷の奥に、ドームを中心とした紫黒の岩壁が立ちはだかって、一段と高い。眼は岩壁のまんなかのあたり、第四尾根のツルムを追う。昭和十四年の十二月、山田と二人でツルムの頭でビバークした思い出がジーンと来る。出合の右岸の林間の岩に藤木九三氏のレリーフがある。大正十四年の八月に藤木氏のパートイグが、同日にこの谷を初めて登った記録がしたゝめられてある。滝谷の出合からさらに一時間、槍平の空堂に着いたのは十二時半だった。中島君（三十六年卒）はこれから荷物を小舎に置いて槍を往復してくると、元気なものだ。蒲田川もこの辺まで來ると広々とした河原になつて氣持がよい。槍平の空堂には小舎が二つあるが、新しい方はまだ釘づけ閉鎖されているので、僕等の泊るのは古い方。この小舎の横手から南岳へ登る道が開かれている。槍平から南岳へ出て、天狗の池を通つて槍沢へぬけるコースなど『玄人好み』でよいではないかという声が専

う。人がいなくて、穂高が変った角度から眺められてよいかも知れませんね。さて夕方、中島君が槍から帰つて来て、小舎の前で焚火をかこんで食事、飯の方は学生の俵君が作ってくれる。僕等の頃と違つて、味噌汁と味淋干しなんていうものではない。コーンスープと豚肉の味噌漬け等々。食事は豪華だし、自分等のグループだけで槍平を独占して晩めしを食うのだから気分は上々。焚火もバンバン燃えるが、いまのアルプスでは監視がやかましくて本当は火も焚けないらしい。

翌二十五日、今日はいよいよ滝谷遡行の日  
天気は昨日より悪く、朝のうちどうやらドームのあたりが見えていたが、だんだん雲霧に閉されてしまう。中島君はリュックを鼠にかじられてボヤいている。小舎発六時、三〇分後には出合に立つ。天候は思わしからず、昨日見えた谷の上部はすっかりガスの中。歩き出してすぐ雪渓となり三〇分ばかりで雄滝、出合からも見えていたが、近寄ってみるとなかなかの勢。それに雪渓との間が深く切れこ

く捲く。雌滝も水量こそ少いが、雄滝以上に大きく、周囲の感じは滝谷的なきびしさとなる。雄滝からさらに一ピッチ、両側の岩壁が一段と狭まつたところが滑滝、ここはもう捲くといふわけに行かない。右か、左か、どちらかの岩壁を登るわけだが、その前に雪渓から岩壁に移つる仕事が残つてゐる。左側から登ることゝし、先づ雪渓のへりに穴を堀り、そこに三人がかりで岩のかけらを運びこんで捨て繩をかける。準備が出来て、学生の俵君がアップザイレンで岩壁に移る。その上は右手にハーケンが見えたが、左手から登つて滝の上へ出る。全員岩壁に移つて、アップザイレンのザイルを引いてしまふと、もう一寸戻り難くなる。ところがこの頃からだんだん雨足が本格的になつてくる。谷は一層暗くなつて、元気が良いのはこの谷の住人の岩燕だけ。二つの滝を越すのに結局三、四時間かゝつたことになる。この辺から下を見、上を仰ぐと、"鳥も通わぬ滝谷"と昔嘉門治が云つた言葉がうなづけるような氣もする。

流する広場となる。同時にこゝから先はもう僕等の領地のようなものだ。どのルンゼを登るか鳩首協議、結局一番まんなかのCルンゼ左俣をつめて直接北穂へ出ることとする。  
こゝから先は次第に急になるルンゼを平川君(四十一年卒)がトップで登る。暗い霧が岩場にまといついて、目印になるツルムやピナクルの類が殆んど見えない。小さい急なルンゼがいくつも同じように入りこんでいて見当がつき難い。平川君のリード、僕等ロートルのアドバイスが一体となつて、蜘蛛が足を張り出したような複雑な地形の中でも一向慌てない。しかしこのルンゼを登つて一番こわいのは、落石だ。ルンゼの中央には、落石の通路が溝のように、あるいは塹壕のようにえぐられている。注意して登つたが、それでも一つ二つ見舞われる。左俣に入つて中程のところが最も急、四十二度あるという。時に岩かげで少憩するが、雨にぬれ、風も加わってブルブルする位寒い。それにしても一月程前、プロのスキーヤーがこのルンゼの上端から蒲

んで、あちこち打診したが直接のルートはと  
れない。中島君の話だと雄滝を越えるのにザ  
イルを使うようでは既にルートを間違えてい  
ること、そこで左手の雌滝の方から大き

がうなつけるような氣もする。  
さて滑滝の上に出ると、左から大切戸へぬ  
けるAルンゼ、北壁の途中へ出るBルンゼ、  
北穂の稜線へ喰いこんでいるCルンゼ、涸沢  
コルへぬけるDルンゼと、四つのルンゼが合

プロのスキーヤーかこのルンゼの上端から蒲田川の出合まで、途中雪に埋れた滑滝は上をすべり、雄滝は懸垂下降してすべりぬいたという話には驚く。この連中になると、スキーエッジがアイゼンのツアッケと同じくらい

う。人がいなくて、穂高が変った角度から眺められてよいかも知れませんね。さて夕方、中島君が槍から帰つて来て、小舎の前で焚火をかこんで食事、飯の方は学生の俵君が作つ

く捲く。雌滝も水量こそ少いが、雄滝以上に大きく、周囲の感じは滝谷的なきびしさとなる。雄滝からさらに一ピッチ、両側の岩壁が一段と狭まつたところが滑滝、ここはもう捲

流する広場となる。同時にこゝから先はもう僕等の領地のようなものだ。どのルンゼを登るか鳩首協議、結局一番まんなかのCルンゼ左俣をつめて直接北穂へ出ることにする。

効くらしい。こゝを登る僕等でも、山田と私はアイゼンをつけているので楽だが、他の三人は靴のまゝだし、リュックは重いので樂ではない。

しかし現役、準現役は流石に強い。やがて傾斜は僅かに緩まり、ルンゼの両側も開けて来て、抜け出たのは南峯のつけ根、昔山田と私が第四尾根を登ったとき、出発早々懐中電灯を落して、夜が明けるのを待つたそのあたりだ。そこはもう北穂の頂上直ぐ下、頂上に着いたのは四時を一寸まわっていた。

随分時間を食つたものだが、この悪天候のなかで悠々と登れたのには満足がある。見覚えのあるツルムやピナクル、カントやテラス、それは殆んど見えなかつた、見えたのはたゞ雨にぬれた滝谷の岩肌くらいだったが、それでも結構心には喜びが湧いた。

その夜の北穂高小舎の泊りは僕等だけ。石油ストーブでぬれ物を乾かし、食事はまた俵君の御馳走、今晚はビーフシチウ。夜に入つてますます激しい雨、雷鳴も交じつて騒々しい一夜、今夜は山田のいびきも気にならない。

二十六日、朝方はまだ面白くない天氣。雨こそ降らないが、ガスがかゝつて殆んど見えない。南稜を下る。南峯直下の稜上の僅かな平地、こゝは昭和十三年の冬、つゞいて十四

年の冬、二度滝谷に志したときのテント場、

## 赤松バットレスのこと

——部誌より

加藤正己（学生）

“赤松バットレス”と言つても、古い会員諸兄には、馴染のない名前だと思われますが、部室の横にあつた赤松の大木の事で、地上十米程のところで枝が三つにわかれ、格好のテラスになつてゐるため、部員の岩登りの練習につかわれ、打たれたハーケンが十数本、最近は“大オーバーハング”を越す人工登攀のルートも開拓されて、皆に親しまれて来ました。が、最近、樹齢のせいか、あるいは余りにハトケンを打ちすぎせいか、次第に枯れてしまつて、今では緑もなくなり、そのうちバッサリとやられてしまうのはなからうかと心配されていたのです。

（編者注）

一九××年××月××日

天下の一大事！ 赤松が切り取られてしまつた。これまで幾多の名クライマーを育てて

きた赤松バットレスは昨日まで確かに、その

念もある。

雄姿を誓っていたが、今日見ると、何としたことか、無惨にも、取付点があるだけで、バットレスは影も形もなくなってしまっている。先輩たちからも、へ赤松は死守せよゝと言い渡されていた貴重な代物だけに、惜しいといふ気持と同時に、この旧大木を愛しておられた先輩たちに対して相済まぬ気持で一杯である。

思うに、赤松バットレスほど一橋山岳部の発展に貢献したゲレンデはないであろう。一九五五年六月二十四日、当時の新鋭クライマーであったT・N氏によつて、バットレスの北面からの初登攀がなされて以来、赤松バットレスには幾つかの登攀ルートが開拓されたが、今までにさまざまな印象深いエピソードも生まれている。登攀用具を一切持たずに単独登攀をめざされたJ・A氏（氏は三ツ道具よりもトリスハーケンやサントリーラザイルをより強い武器と見做していた）のドラマチックな敗退などその一例であろう。

毎年、コンペの夜など（もつとも、年中そうであるが）、バットレスの取付点ふきんに奇怪な音声を発して御酒がわりに奉げられる飛沫は僕らの赤松バットレスに対する感謝の

野橋まで走ってきてからアブミ二台を用いて

バットレスにとりついたのだつた。むしかつ

して一番深いものは、何と言つても、入学し

い日であつたが、この単独登攀は快調に終り

登攀終了点の二股テラスでしばらく休んでい

ると、可さん（御冥福をいのる）宅横の小道

から仲むつまじそなアベックが歩いて来た。

別に気にもとめずといい気持でのんびりして

いると、このアベックは僕のいる赤松バット

レスすぐ下の小道を往きつ戻りつするのだつ

た。何をしていやがるんだ！少しづつ僕は気

になりだした。よく見ているとヘアベックは

赤松の上にいる僕のこと気に気づかないようだ

った）、彼らは不粹な邪魔者がないかどうか

確かめているのだつた。そのうち、誰も（僕

以外には）いないことを悟ると、やおら立

ちどまつて、お互ひ、いい気持そうにひしと

抱き合つた。順序として、次に彼らがなすこ

とはペーゼである。見てゐる僕にとつてはほ

んの数秒間にすぎなかつたが、彼ら二人にとつてはたまらない程長い時間だつたろう。忌々しく思いながら僕は今や一体となつた二人

を見おろしてゐたが、ふとした氣のゆるみから、持つていたアブミ一台を落としてしまつた。ガチャン！何ともはやバツの悪い音がしたのだ。二人はアブミに気がつき、視線を

すっと上にあげ、二股テラスにいる僕に目を  
ええた。へ……／＼へ……／＼ああ、あ  
の時の僕の顔はどんなふうにゆがんでいた事  
であろう。

僕はバットレスを降り、アベックは体をは  
なした。僕はアブミをひろい、すごすごと部  
室の中に入つた。窓からのぞくと、アベック  
は磯野研究館の方に立ち去つた。僕は部室の  
中で大文字になり、ワアー！ とわめき声を  
あげた。

これが赤松バットレスに関する第二の思  
い出である。どちらも快い、楽しい思い出では  
ない。むしろ、不愉快な、こっぱずかしい思  
い出である。しかし、僕は赤松バットレスに対  
して非常な愛着を感じている。たとえ赤松バ  
ットレスは崩壊してしまつても、取付点の根  
っこがある限り、僕らはバットレスの威容を  
懐ぶことができるのである。

長い間山岳部の部長をつとめていただ  
き、この三年間は針葉樹会の顧問として、お供えして微意を表したことと報告して  
蔭に陽にお世話になつてきた太田可夫先  
生が、去る七月四日、心臓麻痺のため、  
自宅で亡くなられた。二十年にわたる闘  
病生活にもかかわらず、最近は元気に講  
義も行なつておられただけに誠に残念で  
ある。深く哀悼の意を表したい。

針葉樹会報では、太田先生をしのん  
八月中の発行を目標に、「特集・太田先  
生追悼号」を出したいと考えている。別  
便で原稿をお願いしたが、それ以外の方  
からも多数追悼をお寄せ下さるようお願  
い致します。(締切は八月十日)

知らせを聞いて、七月五日のお通夜か  
ら七月六日の告別式にかけて、針葉樹会  
からも連日約二十名の会員がおくやみに  
かけつけたが、山岳部では先生ばかりで  
なくご家族にも長年お世話になりっぱな  
しだるにもかかわらず、先生のご存命  
中に、何のご恩がえしもできなかつたこ  
とが、かえすがえすも残念である。なお

## 太田可夫顧問逝去さる

針葉樹会として香典(壱万円)と盛花を  
お供えして微意を表したことを報告して  
おく。

## 会務報告

中島 寛

一、海外遠征をめぐる動き

① ヒンズークシュ遠征隊歓送会

何回も挫折しかけながら、会員はじめ多く

の方々の暖かいご支援と隊員のねばり強い努力が実って、いよいよ、一橋山岳部三回目の海外遠征が実現した。目標はカラコルム西域ヒンズークシュ未登峰のルンコーエ峰へ六八九〇米）およびサラグラール南峰（七三八七米）。

そこで、五月二十四日（水）如水会館南北日本間において、盛大な歓送会を開催した。

△出席者

中川孫一、吉沢一郎、松木謙三、村尾金二、

五十嵐数馬、近藤恒雄、高見要、鈴木英雄、

望月達夫、岩崎利一、佐野茂雄、山田亮三、

久保孝一郎、松下順吉、小林茂雄、樋口洪、

横山院一、甘利仁朗、中村幸正、中村保、

丸子博之、中川滋夫、大賀二郎、小林進二、

中島寛、大健二郎、三井博、多田伸治、

長沢道彦、小島和人、高崎俊平、平川紀男、

以上三七名、他に山本隊長以下隊員七名およ

び学生六名（中村、加藤、俵、戸川、藤浪、西牟田）

（原、佐藤久、池知、宮武同乗）

一九六十年アンデス遠征隊吉沢一郎隊長の発声で、隊の前途を祝福して乾杯を行なった

六月十九日 倉知、鈴木飛行機にてカラチ発

まで、多くの先輩から、「遠征学のAからZまで」とくにチーム・ワークについて心のこもつたアドバイスが続いた。

今回の遠征隊は平均年令二六・六才と若い

が、それだけに、登山はもとより、エクスペロレーシヨンの面でも、広くがめつく歩きまわって大きな収穫をえてくれるだろう。

② 遠征隊の出発

五月二十九日（月）山本、佐藤久

九・〇〇AM 羽田発

六月三日（土）鈴木、原、池知

△出席者

六月七日（水）倉知、宮武

○・三〇PM 羽田発

③ 遠征隊の進捗状況

六月八日 山本隊長交渉のためカラチ発ラ

ワルピンディへ

六月十六日 国境から十マイル以上はなれ

た地域での登山活動を許可する旨の正式

の許可書を入手

六月十七日 全荷物三トン無事通関、トラ

ックで直ちにラワルピンディに向け出発

（原、佐藤久、池知、宮武同乗）

六月二十一日 全員ラワルピンディ集結、その後の経過は十一ページ「ヒンズーキュ通信」をご参照願います。

④ ヒンズーキュ遠征募金の件

皆様方の暖かいご支援によつて、遠征資金八百万円は何とか集めることができたが、会計報告は改めて行なうこととして、法人関係の寄附は、三八一万円、そして針葉樹会の内

部での募金は、七月二十日現在、応募二七八万三千円、入金額二二九万九千五百円となつた。心から感謝するとともに、今後ともよろしくご協力いただきたい。

二、針葉樹会一九六七年度総会

今年度は遠征隊の出発という事情もあって若干遅れたが、七月七日（金）如水会館において一九六七年度総会が行なわれた。

他の如水会行事行事と重なつたりしたため

出席者はそれ程多くはなかつたが、昨年度の活動をふまえて、部室の改装、一橋山岳部五十年史の編さん等、前向きの問題に議論が集

中して大いに意氣上った。

### 一九六七年度針葉樹会総会議事録

日 時 一九六七年七月七日（金）

午後六時半～九時

場 所 如水会館集会室

出席者 中川孫一、松木謙三、吉沢一郎、五

十嵐教馬、近藤恒雄、黒田正治、望月達夫

大塚 武、佐野茂雄、久保孝一郎、松下順

吉、吉田義則、小林進二、大賀二郎、小林

正直、山本尙禎、中島 寛、小島和人、三

森茂充、高崎俊平、平川紀男以上二十一名

委任状五十四名計七十五名で総会成立、そ

のほか、中村チーフ・リーダー以下六名の

学生が出席した。

### 議 事

去る七月四日逝去された顧問太田可夫先生の冥福を祈つて一分間の黙禱を捧げたのち議事に入る。

### 一、一九六六年度活動報告（中島）

年六回の会報発行、年六回の懇親会等ほ  
と公約を果すことができたが、今年度はこの基本線を崩さず、しかも質を高め、内容をよ  
くしていくよう努力したい。またできれば長期的な活動の基盤をつくることに着手してい  
きたいという趣旨の報告があった。

### 二、一九六六年度会計報告（山本）

同封決算書のとおり、報告にひき続き、吉

田監事からの監査報告があり、満場一致で承

認された。

### 三、役員の交代－新役員

会 長 中川孫一（留任）

副会長 望月達夫（〃）

評議員 吉沢一郎（留任）、手塚晴雄（留任）

大塚 武（新任）、岩崎利一（留任）

鈴木英雄（新任）、久保孝一郎（新

任）、松下順吉（新任）、中村正司（留任）、石原 健（新任）、中村

保（新任）、沢木一夫（新任）、大

賀二郎（留任）、三森茂充（新任）

幹 事 奥野巖根（幹事長・新任）、中島 寛（総務・留任）、山本尙禎（会計

留任）、長沢道彦（企画・山行・新

任）、小島和人（企画・山行・留任）

平川紀男（会報・新任）

（大分顔ぶれが新しくなり、張り切つている

ので、会員諸兄のご支援、ご鞭撻をお願い

します—編者）

### 四、一九六七年度予算および活動方針

同封の本年度予算について承認を受けたの

ち、今年度の活動方針につき説明があり、若

干の質疑応答があつた。

今年度活動方針の大要は次のとおり

① 会報年六回の継続

② 山行の充実

○九月十五日（金）～十七日（日）

徳沢および奥又の池にテントをはり、合宿（敬老の日）にちなんだ行事予定）

十月二十一日（土）～二十二日（日）

東沢遭難碑除幕式（二十一日午后発、川浦温泉泊、翌日、除幕式、希望者は碑の

前にテントを張り月見をしながら酒をくみかわしたい）二十三日は甲武信へ出る

○一月 冬山合宿（期間、場所未定）

○二月 or 三月 懇親スキー

○四月 学生と合同で新入部員歓迎ハイキン

グ

○五月 春山合宿（期間、場所未定）

○六月 学生と合同で新入部員歓迎ハイキン

グ

○七月 夏山合宿（期間、場所未定）

○八月 夏山合宿（期間、場所未定）

○九月 夏山合宿（期間、場所未定）

○十月 夏山合宿（期間、場所未定）

○十一月 夏山合宿（期間、場所未定）

○十二月 夏山合宿（期間、場所未定）

組み込んでいきたい。

#### 五、ファンド設立への試み

経常会費による運営では限度があるので、映画会等の企画を実施することにより臨時収入をふやし、長期的な事業を行なっていくためのファンドの基礎をつくっていきたい。そのため、新たに企画、山行関係の幹事を二名とした。

#### 六、その他

##### ① 一橋山岳部五十年史編集の件

先般金田近二名譽会員よりのご提案もあり、五十年史をまとめようという方向が確認されたが、編集委員の選任等、幹事会に一任された。(今後は評議員会を中心に検討)

##### ② 部室改築の件

部室もすでに建ってから三十六年、ずつかり老朽化してしまい、山岳部、針葉樹会ともに、改修の費用積立てをはじめたが、総会の席上大塚氏より提案があり、むしろ、磯野氏の一回忌に、針葉樹会の感謝の意をあらわすため皆で金を集めて改築したらどうかという提案があり、満場一致で承認され、今後の運びを幹事会にまかされた。(注、その後の大塚側との交渉ではこれまで既成事実として認められてきたが、現在の段階で新たに建て

ることはきわめてむずかしい様子である)

#### ③ 日本山岳会のルーム移転に伴う寄付の件

一橋山岳部も加入している日本山岳会では今回新たにルームを移転し、その改装費用にあてるため募金を行なっていたが、一橋山岳

部にも募金の依頼があつた。種々議論があつたが、募金に応じることについては満場一致

で可決し、募金額については幹事会に一任された。

## 大阪針葉樹会懇親山行開かる

だつた。

会員ばかりでなく、その家族や友人を含め

ての老若男女の懇親山行は東京の針葉樹会で

(10) も余り例のない事でもあり、和気あいあいと

した、非常に有意義な懇親山行であつたよう

である。

なお、今後とも、このような懇親山行をはじめ、種々の催しを計画して、大阪針葉樹会

独自の活動も大いに実行したいと幹事の石田

君はハリキッています。

藤君と石田の会社の女性二人という多彩な顔ぶれであった。

当日の日程はまず京阪電車の三条の駅から

ドライブ、それから鞍馬の山にわけ入り、頂

上で昼食をとった後、鞍馬寺に下って少憩、

そこから再び車で京都国際会館の辺りまでドライブして、夕刻、全員そろって帰阪した事

# ヒンズークシユ通信

(1)

倉知

敬

## カラチ到着

飛行機から一歩出ると、猛烈な熱気がワアーンと押し寄せて来て、とうとうやつて来たんだなという感慨をいやが応でも呼び起してくれます。

六月八日の早朝、僕と学生の宮武はカラチに到着、既に数日前から滞在中の他の隊員を含め、これで全員現地にそろった訳です。うす黒い顔にギョロリと目を光らせている税関吏に、まだうまく口から出てこない英語で何とか所持金の申告などしてから窓口に手荷物をとりに行くと、棚越しに山本隊長や原・佐藤などの顔を見付け、ホッとしました。

皆、数日前に日本で見送った時とはうつて変つて、落着いた顔をして並んでいました。一諸に迎えに来てくれた三井物産駐在員の関口氏のお蔭で通関はアッケなく終り、直ちに彼の車で市内に向いました。

カラチでの各隊員の滞在は、山本・佐藤久が日本輸出入銀行のバンガロー、鈴木ドクタ

ー・原・池知・宮武の四人が日本人クラブ、倉知が三井物産のバンガローという分散宿泊をすることになりました。こうするのが一番安上りだったからですが、この三つはお互に案外近く、仲々便利でした。

さて、翌九日には、山本隊長が単身、関係官庁へのあいさつ等のため、ラワルピンディヘ向い、すでに二ヶ月前より滞在中の佐藤之と合流、残った六名は、カラチにて、二、三日中につくという我々の荷物の通関手続のための交渉に当ることになりました。

この荷物の通関のために、結局のところあと十日ばかりの日数がかかりましたが、この間、書き出せばキリのない程の繁雑な手続がつづき、気の遠くなるような暑さの中で忍耐の限りをつくしました。税関に通うこと十数回、要した関係書類が三十枚といバカバカしい交渉の末、何とか十七日に保証金を積んで通関を終え、直ちにその日の夕方二台の大型トラックをチャーターしてラワルピンデ

イに向いました。

このトラックに、荷物の監視のため、原・佐藤久・池知・宮武の四人が便乗、熱砂の沙漠を二日半走り通して無事ラワルピンディへたどりつきました。

カラチには殆んど全員が十日余り滞在したのですが、当地のおよそ親しめない社会風習やら、厳しい暑さのせいでの在留邦人より以上つき合いにめぐまれる程の余裕もなく、あわただしく通り抜けて来たような具合だったのは残念でした。

## ラワルピンディにて

トラック出発と前後して、カラチに残った鈴木、僕の両名は、大使館へのあいさつなど一切をすませて十九日空路ラワルピンディに向い、二十日早朝、トラック隊と前後して宿泊予定のフランシュマンホテルに到着、以前より滞在の山本隊長・佐藤之の二人に迎えられ、こうしてとうとう二ヶ月振りで、隊員全員一同に会した次第です。

二ヶ月以上も当地へ滞留の佐藤（之）は、

るのですが、致し方ありません。

顔色もすっかり現地人並みなばかりか、立居振舞までバタクさくなつていて、なかなか頼もしい限りです。長い間の登山許可交渉の経過などくわしい話をつらつらと聞き、予想以上に手間どつたけれど、何はともあれ、ヒンズーシュの未踏峰を目指すことの出来る我々の幸運を祝い合つたことでした。

#### ・ チトラル

さて、それから後にのこされた、キャラバン出発地チトラルへの転進、リエゾンオフィサーの問題など、それはそれで又々語ればつきぬ過程を経たあと、二十五日には全員チトラルへ到着致しました。

ピンディからチトラルへは普通、ペシャワル経由の定期航空路を利用するか、陸路、ロワライ峠を越えて行くか、のどちらかがとられていた訳ですが、パキスタン航空が我々のために一台飛行機を二十万円位で飛ばしてくれた事になつて、一気に殆んど全荷物をチトラルへ運び上げられたのです。

リエゾンオフィサーは、やはり我々の隊の特殊な事情からか、二人ついてくることになり、そのきびしさにいささか幻滅を感じてい

ロワライ峠を越えると空気が変わると言われていますが、チトラルに着いて見るとまつたくその通りでした。あの、山地の澄み切つたさわやかさが、強烈な日照の下であります。乾燥しきつた世界に点々とつづく緑は、本当にオアシスを感じさせます。

#### （以上チトラルにて）

それでも、この一三八個の荷物を整えるのに昨日一日、きびしい労働を強いられる始末でした。

キャラバン行進は、先頭を歩いてキャンプサイトへ安全に誘導する役に佐藤（之）と原（）とリエゾンのフアルーキ大尉、しんがりに山本隊長、倉知、リエゾンのアシュラフ大尉、中間に適宜、鈴木ドクター、池知組と、佐藤（久）、宮武組が入つて歩くという体勢で、これは大体、B・Cにつくまで形をこわさずやって行きました。

朝食の前、手荷物の整理やら何やらでまことにあわただしく、馬方達のうばい合い（軽いものを選ぶための）が一層それに輪をかけ、落ち着かぬまま、一頭々々ロバは出発して行きました。

当初予定していたようにチトラルから人夫

の背をつかつてキャラバンをするのはここ的事情に合わず、結局のところ、五十六頭のロバと三頭の馬をつかつて、道のいい途中のドラサンの部落まで行き、あとは氷河の中まで人夫を使う、ということになりました。

を待つてゐる内に結局、実質的な出発は九時半頃になりました。

一頭々々、小柄なロバが緑や黄色の袋を重そうにかつて、よろよろと通り過ぎていく様をボンヤリながめていると、六年前のあのアンデスのヤンガヌコ谷で、まつたく同じかっこうをしてロバが歩んでいった様があります。りと思い出され、この彼我の差の、いろいろな意味での大きな違いが、あまりにも光景が似ているだけに、強烈に感じられて胸打たれる気持でした。

さて、殆んど皆初めての経験なので、荷物の数を確認するとか、ロバと歩調を合わせて行くとか、いろいろ勝手がわからなくて、キャラバンにくつついしていくのが精一杯、おかげに強烈な日差しに体が干上がるようなショックを受け、慣れぬ体を動かすのに大わらわという感じでした。最初の日から殆んど全員がマメをつくる始末でしたが、それが皆不思議なことに底マメで、これはB・Cにつくまで悩みの種でした。きっと地面がひどく熱せられているためなのでしょう。

第一日目は十五マイル歩いて、コゴチといふ所まで、しんがりが到着したのが三時頃の暑いさかりでした。その後は木蔭の芝生でア

ンズなど食いながらゆっくり休養、始めて旅の余裕を感じた次第でした。翌日からは暑い日照りの道を歩く愚をさけようと、朝早く出て午前中に行進をすませようということに決めました。

#### シャンドール街道をゆく

昔から、通商路としてパミールとインダスを結ぶ街道がいくつか使われていたのですが、その内の一つにヒンズークシユのパロギール峠を越え、マスツジ・チトラルを通るシャンドール街道と呼ばれているがありました。我々のキャラバンは、この街道をチトラルに行くとか、いろいろ勝手がわからなくて、キャラバンにくつついいくのが精一杯、おまけに強烈な日差しに体が干上がるようなショックを受け、慣れぬ体を動かすのに大わらわといふ感じでした。最初の日から殆んど全員がマメをつくる始末でしたが、それが皆不思議なことに底マメで、これはB・Cにつくまで悩みの種でした。きっと地面がひどく熱せられているためなのでしょう。

この都合七日間のキャラバンを振り返って思はれるのは、何より強烈な照り返しに白く光る道の有様ばかりで、ことのほかきびしい行進でした。もちろんいろいろ語ればつきぬ出来事もありましたが、どちらかといふと単調な旅だったと言えましょう。

第一日はチトラル→コゴチ（十五マイル）、第二日はコゴチ→バレニス（十二マイル）、第三日バレニス→クラー（十七マイル）、第四日クラー→ドラサン（十マイル）、一日の休養をおいて、第五日ドラサン→サルト峠越え→ズンドラングラン、第六日→氷河末端、第七日→B・C（高度約四〇〇〇米）といつて具合で、ドラサンまでは駄獣、そこからは一三一人の人夫をやとつての行進でした。

クラーまでは、チトラル谷の左岸沿いの起伏多い道で、一〜二時間おきに山ひだから小

谷が流れ落ち、そこに一かたまりのオアシスがあり部落があるというような調子で、その間は、急崖の高まきあるいは沙漠のような荒地、何らうるおいのないきびしい所で、次々と点在する部落を通り抜けて行くと、水のもうつ意味というのを痛切に教えられるばかりでした。その谷あいから流れ込む水も、決して日本の大渓流に見られるような澄んだ水ではなく、白く濁り、細かい砂粒のまじった貧弱な水ですが、それがあるだけで、人間の営みがこの乾燥地で許されているのを目あたりに

みると、水の偉大さをつくづく感じるばかりです。ただこの住民たちには衛生観念がまったくないのか、灌漑水も水道も同じで、水

を所望すると、畠のよこを流れるドブからヒヨイとすくって出されるのには閉口でした。もつともその内に皆慣れてしまつて、ドブ水をガブガブのみ、あとで申し訳に薬をポンとのむ始末、ドクターも、それで皆が平氣なのにあきれてなにも言わなくなりました。

もう一つ、ものの価値というものを再認識したのに「木」があります。再三いうように、非常に日照強く、暑さはきびしいのですが、乾燥地だから日蔭に入りさえすればとてもし

のぎやすい。だから木蔭に芝生とくれば天国です。レストハウスとか、村の金持の家の庭には、大概楓の巨木があると相場が決っています。一日の行程を終えて、木蔭でそよ風に吹かれて昼寝という図は、一日で最もくつろぐ瞬間です。

さて、クラーからはチトタルの本谷をはなれ、山あいに入るので様子も変わり、山も段々見えてきました。行く手の右にはブニ・ゾムの連峰が、これは又予想以上にすばらしい容相をみせて聳立していました。高度も同じ位なせいか、非常にアンデス的な山で、針峰が四つきれいに並んでいます。西側はいすれもきびしい氷壁で、ワイワッショなどの山並とまったくそっくりです。今年これに入ると

いうドイツ隊も我々と前後して出発していきましたし、この連峰が登りつくされるのも遠いことではないでしょう。機会あれば帰りに寄りたいものです。

第五日目、ドラサンよりやつとのことで三九〇〇米のサルト峠に登ると、目の前にロシュ・ゴルが広がり、サラグラールの南面が大観です。

#### ロシュ・ゴルに入る

じみ思い出した次第です。

峠からジグザグに下っていくと、ロシュ・ゴルが段々と大きく、目の前にせまつてきます。左右の山脈が七千米、谷の入口が約二千五百強の高度ですから、上下五千米の雄大な景観です。

それが雲一つなく目前にありますと、日本の景色の美しさとか、又アンデスの華麗な山岳美などとは丸で質的に異なつた、何かまたまりはないけれど、大きさだけのもつ迫力がぐっとせまって来て、殆んど無力感におそわれるというか、ボウゼンとして、当り前の感情がわいて来ません。

さて、このロシュ・ゴルは二日間で登りつめ、アブレー・ション・ヴァリの、溪流流れます。左右の山脈が七千米、谷の入口が約二千五百強の高度ですから、上下五千米の雄大な景観です。

(14)

周囲には、サラグラールを始め、ランガール・シャチャウール、ウドレン・ゾムなど何度も耳にし、目にした山々が近々とそびえ立っていますし、無名の七千米近いきれいな山々もいくつか望めます。しかし、どれもこれ

もこちら側はすごい岩壁ないしは氷壁となつていて、手もつけられない容相を呈しています。

ロシュ・ゴルの入口にはズンドラングランという部落がありますが、ここで人夫をやといかえます。この手続が又色々と大変ですが、

この辺は、二人もりエゾンがいることですから、難なく終りました。ロシュ・ゴルは下部は非常なゴルジュになつていて、高まきの連続、道も所々緊張させますが、しばらくすると部落などもあり、アルプ的風景となります。しかし、ヒンズークシユの谷というのはどうしてこう何もかも大柄で、纖細なところがないのだろうと思う程、全体がガラガラしていて、改めて日本の風景の美しさをしみじみ思い出した次第です。

今後、ここに約五十日間居ることになるのですが、どのルートをとるにしても相当きびしいものになるだろうと思われます。腰を落ち着けて、まずは高度馴化を完全におこなつてから、取りかかろうと考えています。

メイル・ランナーは約十日おきに走らせるよう手はずを整えてあるので、次回には登頂の見通しなど、お知らせ出来ると思います。

(以上 B・Cにて)

### 遠征隊ニュース

#### 池知隊員負傷の為単身帰国

山本隊長からの電報によると、七月十二日、ルート偵察中の池知隊員が高度六千米の氷河上で落石にあり、左大腿部を骨折するという事故が起った。幸い、生命に別条はないが、歩行不能の為、全員でB・Cに降ろし、ギブスで固定した。現地ではよい病院もないのに、治療の為帰国することになり、七月三十一日単身羽田着の予定。他の隊員は池知君を救出後、サラグラー・ル南峰（最新高度で七三五〇メートル、主峰（七三三八峰）および付近の未踏峰を登るために、既に行動を再開している。

なお、池知君は帰国後、川崎市小杉、東横病院整形外科（TEL○四四一七一二二二）に入院する予定だが、本人はすこぶる元気とのことなので安心されたい。

### 遠征隊員寄せ書き

今後、ここに約五十日間居ることになるのですが、どのルートをとるにしても相当きびしいものになるだろうと思われます。腰を落ち着けて、まずは高度馴化を完全におこなつてから、取りかかろうと考えています。

今のところ、資金、装備及び食糧の関係でお世話になつた方々に出状するため、毎日会社に居るときよりデスクワークが多い有様で、会員の方々には、失礼しています。

凍傷よりペンドコの方が危険が大きいようです。

仲々面白く、複雑な山のようで、登り甲斐も充分です。昨日下からきたボストラントンナード

では、チエコのティリチ・ミール隊の一人が負傷したとか、あちらも大変のようです。

昨日は偵察で五千メートルまで行きましたが、高度の影響は小生の場合胃にくるようで、まだ腹がへって、食欲が増しただけでした。

(山本隊長)

日本を発つてから三ヶ月、ようやく周囲を山に囲まれた氷河の中に身を置き、ほっとしても充分です。昨日下からきたボストラントンナードでは、チエコのティリチ・ミール隊の一人が負傷したとか、あちらも大変のようです。

昨日は偵察で五千メートルまで行きましたが、高度の影響は小生の場合胃にくるようで、まだ腹がへって、食欲が増しただけでした。

他の隊員は池知君を救出後、サラグラー・ル南峰（最新高度で七三五〇メートル）、主峰（七三三八峰）および付近の未踏峰を登るために、既に行動を再開している。

なお、池知君は帰国後、川崎市小杉、東横病院整形外科（TEL○四四一七一二二二）に入院する予定だが、本人はすこぶる元気とのことなので安心されたい。

(鈴木ドクター)

ここは高度約四千米、ロシュ・ゴル氷河の真中のベースキャンプです。周囲は六、七千米峰がいくつも望まれ、誠にすばらしい所です。ここへついて今日で三日目ですが、予想外に山は手強そうで、今の所どういう見通しありません。とにかく厳しい状況です。しかしまずは慎重にじっくり取り組んでいこうと思います。

(倉知)

日本を発つてから三ヶ月、ようやく周囲を山に囲まれた氷河の中に身を置き、ほっとしました所ですと言うべきなのでしょうが、二回の偵察登高の結果はいずれも厳しいものに終り、

今どの所のルートを取るべきかは未だ決っておりません。とにかく今まで「たゞ高いだけ」といふくびつっていましたが、さすがに山の構造は複雑で、あっさり短期間でかたづけてその他の六千メートル級をこなすのが難しくなっています。たサラグラーは、ロシュ・ゴル側からの登攀に関する限り、かなりの困難が予想されます。

B・Cのすぐ北西側に、サラグラー、ウドレン・ゾムがそびえています。

（佐藤之）

心配していた時も今のところはどうやら大丈夫で、目下快適な生活を送っています。まだ最高高度は四千五百米ぐらいしか経験していないませんが、それほどの高度の影響も受けずこの分ならかなりやれそうです。

(佐藤久)

ハイ・ポーターやコックという下男を雇いまことに優雅な生活を送っています。”サー・ブル”と呼ばれる度に、ついニヤニヤとしまらない顔になります。まことに人にかしづかるというのは愉快なものです。

(原)

流行の先端を行く私奴は、早くも高度の影響をうけ、一昨日は完全にダウソ。昨日は昼頃より調子を見るため鈴木先生と四百米位高度を上げてみましたが何ともなく、自信をとりもどしました。

丁度、夕方の逆光の中にウドレン・ゾムから落ちる雪崩をとらえ、スケールの大きさにボウゼンとしました。

(池知)

Hitotsubashi University Expedition  
c/o Chitral Post Office  
Chitral State, WEST PAKISTAN

今夜は七夕、六、七千メートル級の峰々とさらにまたたく間に囲まれたすばらしいキャンプサイトです。

先日の偵察登高で五千メートルまで行き、高度の影響で頭がズキン、ズキンとして、さすがにすぐえと思いましたが、これが効果的だったと見え、目下食欲旺盛、ここ二日間何も知らずにはるばる昇ってきた羊を見事に平らげています。

(宮武)

「ヒンズークシュ通信(1)」にもあるように、メールランナーが十日おきにB・Cとドラサン郵便局の間を走っています。

私信によれば、手紙など来そうもないとひがんでいる隊員もいるそうで、会員諸兄には、現地で奮斗している隊長はじめ隊員諸氏に、激励の手紙を出されるようお願い致します。

宛先は左記の通りです。

前任者の倉知さんが、会報の年六回発行という公約を果たしてヒンズークシュに飛び立つていつたのが六月初旬、時はアツという間に過ぎさせて、早くも丸二ヶ月になろうとしています。この間、原稿集めをはじめ、編集の仕事も全くの素人ゆえ、仲々思うように進まず、大分あわてたりしましたが、何とか十九号の発刊に漕ぎつける事が出来ました。種々致らぬ点があると思いますが御容赦願います。

先日の針葉樹会でも先輩諸兄の強調された如く、針葉樹会報は会員と会員の心を結ぶ糸でありたいと思います。もつともつと多くの会員の方に原稿を書いていただきて、積極的な姿勢で発行していくたいと思っていました。会員諸兄の御指導御協力をお願いたします。

なお、編集の途中で太田可夫顧問の計報に接しましたが、先生と一橋山岳部、針葉樹会との因縁を考える時「追掉号」を別の形で出すべきだと思いました。八月中の発刊を目指して准备していますので、先輩諸兄の追掉の言葉をお待ちしています。

(平川)

## ◇ 編集後記 ◇



